新進路指導の潮流

鳥取県立倉吉東高校

低学年指導と個別指導の充実で1人ひとりに合った高校生活を提示

高校における生徒の進路指導のあるべき姿は、ここ数年で大きく変わってきた。3年間の高校生活を終えて、その結果としてどの大学・学部に進むという発想から、将来この進路に進みたいからこんな3年間を過ごそうというものへと移行しているのだ。

「従来のいわば出口指導といわれる指導、つまり『きみは何点だからどこの大学・学部に』という指導は、今や最低の指導だと思います」

鳥取県内でも有数の進学校である鳥取県立倉吉東高校の牧尚志先生はそう語る。同校は読書・小論文指導や学部・学科や職業に関するレポート作成、韓国への海外研修旅行など、倉吉東高生としてあるべき自分の姿を生徒それぞれが明確にイメージし、将来への進路意識を高めるためのさまざまな取り組みを行っている。

変わる生徒たち

生徒が将来の目標を掲げ、それに向けて有意義な3年間のスタートを切ることができる「入口指導」への転換を着々と進める同校だが、そのためには高校に入ってくる生徒にもしっかりした目的意識を持って入学してくることが望まれる。しかし最近は、「はっきりとした目的を持てない生徒が増えている」という声が多くの高校現場で聞かれる。

「社会状況の変化なのか、その理由はわかりませんが、『なるべくやりたいことをやって楽しみたい』というような、要するに無目的に、なんとなく高校に入ってくる、あるいは享楽的に過ごしたいという生徒の割合が高くなっているといわれていますよね。つまり、将来設計をして、自己実現するために、3年間をこういうふうに過ごしたいという目的意識を持って高校に入学してきているんじゃなくて、そのときそのときを楽しくおもしろおかしく過ごそうかという、そういう傾向が高くなっていると。でも、だからといって生徒が悪いっていうだけじゃ、進路指導になりませんよね」

重要になる低学年指導

「そういう生徒気質の変化が止められないのなら、それじゃあ我々の学校はどういうふうに生徒に実現すべき自己のイメージを持たせるか。そして実現すべき自己に到達するためのスケジュールを、教師がどういうふうに生徒に示せるか。そこがこれまで以上に問われるのだと思います」

そこで重要になってくるのが低学年指導である、と牧先生。3年間の高校生活を目的に向けて系統立てられたものにするには、特に入学後のできるだけ早い段階での生徒理解が求められる。

「私たちは新入生に対して4月の2週目くらいに『スタディーサポート』を実施して、中学時における学習背景、学習習慣を、学年全体そして生徒1人ひとりの両方の視点で把握しています。例えば、入学時点での学力の特徴、中学のときにどの教科をどのくらい勉強したか、また家ではどの程度勉強しているのか、さらに今の勉強のしかたが高校では適当かどうかなど、そういうことを把握して、日々の指導に反映させていこうというねらいです。4月の終わりごろから行う、生徒との個人面談の話題にも活用しています」

同校では1年次の9月、3月にも「スタディーサポート」を実施している。それぞれの目的は夏休みを終えた個々の生徒の入学時との変化を測ること、2年進級に向けて新しい担任が新たに生徒把握を行うことにある。低学年次の学習、生活の節目となるこの時期に「スタディーサポート」を実施し、担任、学年団、教科担当が、3年間を見通した系統立てられた指導ができているかを確認しているというわけだ。また、過年度との比較で、その年度の生徒たちの集団としての学力把握も行える。

やるべきことを生徒が知る

また、最近の生徒気質の変化は、個別指導の重要性を高めている。

「ホームルームや授業で生徒全体に向かって一斉に話をするだけでは、なかなかこちらの思いが伝わりにくくなっていて、教師はかなり個別に、生徒1人ひとりに向かってものをいわなければならなくなっています。そういう時代ですから、生徒理解、生徒把握がますます重要になっています。教科指導においても、昔なら成績のよい生徒に対しては『放っておいても自分でやるだろう』と、また成績のあまりよくない生徒には『まだまだ努力が足りない』といえたかもしれませんが、上にはみ出す子も下にはみ出す子も、学校が自前で鍛えようとするなら、教師がさまざまな生徒に合わせて一定の刺激、教材を与えていかなければなりません。その究極の指導スタイルが個別指導なんでしょうけど、教師のパワー、使える時間は限られています」

そこで「教師、生徒がやらなきゃいけないことをそれぞれ明確にするシステムが必要」と牧先生。「スタディーサポート」はそのシステムの中に組み込まれているという。

「学校の授業、そして家庭学習で教師と生徒がなにをするか、なにをしなくちゃいけないか、授業の守備範囲と個々の生徒の守備範囲が明確になっていかないといけません。教師が生徒1人ひとりの学習状況を把握し、生徒自身も自分の弱点、課題を意識でき、その克服に取り組めるという面で『スタディーサポート』は機能していると思います」

鳥取県立倉吉東高校
牧 尚志
昭和28年鳥取県生まれ。国語科担当。
昭和62年度より同校に勤務。平成5年度より学年主任。
昨年度は2学年担任を務め、韓国研修旅行を中心とした国際的視野を育成するための指導などに尽力した。

自己理解が自制心を生む

志望や学力、生活習慣は生徒1人ひとり異なる。それゆえ生徒それぞれに倉吉東高生としてふさわしい過ごし方がある。それを確立していくのが個別指導の目標だと牧先生は考える。

「例えば『10年後の私』というテーマで作文を書かせて、10年後に自分はどうなっているんだろうかとイメージさせることで、実現すべき自己を持たせ、そのためにはどうすればいいかを調べさせる。いわば、自己実現するための目標を持たせる営みなんですが、そうして目標に向けた毎日の中に自分がいることを実感させれば、生徒はセルフコントロールがきくと思うんです。つまり、今なにをどの程度しなきゃいけないかがわかれば、昨今の『やりたい放題にやる。やりたくなきゃやらない』という風潮が抱える問題をある程度防げるかもしれません」

実現すべき自己と、それに向けてなにをやるべきかを生徒に気づかせるために、さらにいろいろな取り組みに挑戦してみたいと、牧先生は語った。